

2013年度
NEC森の人づくり講座（第27期）
実施報告書

平成25年11月9日（土）～11月12日（火）

Aコース オークヴィレッジ／森林たくみ塾

Bコース キープ・フォレスターズ・スクール

応募状況	Aコース		Bコース		合計
	現役生	OB	現役生	OB	
エントリー数	12	4	14	1	31
参加者数	9	4	10	1	24

主 催： 公益社団法人 日本環境教育フォーラム

協 賛： 日本電気株式会社

プログラム運営： 森林たくみ塾／公益財団法人キープ協会

目次

Aコース：オークヴィレッジ／森林たくみ塾(岐阜県高山市清見町)	1
■ 講座のねらい	1
■ スケジュール	2
■ プログラム報告	4
<1日目 出会い ～知識を入れる器づくり>	4
<2日目 森と私のつながり ～体験を五感で感じる>	5
<3日目 森と私のつながり ～手を動かして考える>	7
<4日目 次につなげるもの ～自分と対話する～>	12
■ Aコース:オークヴィレッジ／森林たくみ塾受講生(27期生)の感想です。	13
Bコース：キープ・フォレスターズ・スクール(山梨県北杜市高根町清里)	17
■ 講座のねらい	17
■ スケジュール	18
■ プログラム報告	21
<1日目>	21
<2日目>	22
<3日目>	23
<4日目>	25
■ Bコース:キープ・フォレスターズ・スクール受講生(27期生)の感想です。	26

Aコース： オークヴィレッジ／森林たくみ塾(岐阜県高山市清見町)

■講座のねらい

- ・環境問題解決のための「具体的行動のひとつ」としての「森の手入れを実践する」中で、自分の内面におきる気持ちの変化を大切にしながら、「実践によってはじめて課題解決へ進みはじめる」ことを実感すること。
- ・森との関わりから、ポスト3. 11の東北復興と暮らし方、自分にできることを考える。
- ・「持続可能な社会」の構築に向けて、ITができることを考える。

■講座中に伝えたいこと

- ① 知識を蓄えたり考えたりすることだけでなく、課題の解決には具体的な行動に移すことが重要。
- ② 地球温暖化問題において、森が持つ二酸化炭素固定能力への期待感を理解する。
- ③ その能力を十分に発揮させるには森づくりを進めなければならない。
- ④ 一人より二人。素人でも束になってかかれば大きな成果を生み出す。
- ⑤ そのために、「人の環＝人を束ねる仕掛け」ネットワークづくりが大切。
- ⑥ 行動するためには、道具の的確な使用法と安全な作業についての理解が不可欠。
- ⑦ ポスト3. 11の暮らし方を考える、その基礎は「緑の国から」。

■そのために大切にしたいこと

- ① 蓄えた知識を「腑に落とす」まで実践する。
- ② 分かったつもりにならず、「五感」を使って物事を感じることに。
- ③ 実践を通して「手応え」を感じることに。

■ スケジュール

1日目 11月9日(土) 出会い ～知識を入れる器づくり

- 14:00 開講式
- 14:40 実技「森づくり導入編」
- 16:00 フリータイム (入浴等)
- 17:00 グループ討議「なぜ森の手入れが必要か？」
- 18:00 夕食
- 19:00 小講義「日本の森を知る」
- 20:30 森人大交流会

2日目 11月10日(日) 森と私のつながり ～体験を五感で感じる

- 08:00 朝食
- 09:00 小講義「ミクロの視点／マクロの視点」
- 10:00 実技「森づくり・実践編」
- 12:00 昼食
- 13:00 実技「樹から木へ」
- 16:30 フリータイム
- 17:00 小講義「手を掛けて森を育てる」
- 18:00 夕食
- 19:00 小講義「震災後に再認識する、森と人との付き合い方」
- 21:00 トークセッション

3日目 11月11日(月) 森と私のつながり ～手を動かして考える

- 08:00 朝食
- 09:00 移動：たくみ塾へ
- 09:15 実技「森のモノづくり」
- 13:00 昼食
- 14:00 特別講義「NECの社会貢献活動を通してみる、社会で働くということ」
- 15:00 見学「オークヴィレッジに見る、森林資源の利活用」
- 17:30 夕食
- 19:15 s k y p e で特別講座「くりこま高原自然学校に見る、東北の震災復興への取組」
- 20:00 小講義「IT×EE＝□を考えよう」
- 21:30 森人大交流会

4日目 11月12日(火) 次につなげるもの ～自分と対話する

- 08:00 朝食
- 09:00 スライドショー「4日間の活動をふり返って」
- 09:30 小講義「森人流、事を起こす・輪を広げる」
- 10:00 実技「ソロ～たった一人でふり返り」
- 12:00 昼食

13 : 00 全体のふり返り
14 : 00 閉講式

■ プログラム報告

<1日目 出会い ～知識を入れる器づくり>



開講式

「むずかしいことをやさしく、
やさしいことをふかく、
ふかいことをおもしろく、
おもしろいことをまじめに、
まじめなことをゆかいに、
そしてゆかいなことはあくまでもゆかいに。」

森林たくみ塾理事長・佃が引き合いに出した井上ひさしさんの言葉が、この講座の趣旨を的確に表しています。

実技「森づくり・導入編」

何をするのかわからないところから「まなび」が始まります。森で行う作業について、説明も具体的な指示も出しません。「先輩たちが手入れをしてきた森を歩いて観察し、これから手入れする場所を先輩たちの森とおなじになるようにしてください。」とだけ指示しました。あとは学生たちが自分たちで考えて行動するのを待ちます。

「どうしてササを刈るの？」-「地面に光が当たるから。」

「地面に光が当たると、どうなるの？」-「木の芽が出てくるから。」

「木の芽が出てくると、どうなるの？」-「・・・」

問答を繰り返しながら、自分が行動していることの意味を深く追求していきます。

『この木は伐るの？伐らないの？良い森ってなんなの？・・・常に頭のなかに、どうして？なぜ？がありました。』『受け身よりも難しく大変なことだけど、ひとつひとつの行動が自分のものになっていく感覚を味わいました。』硬い頭が少しずつ解きほぐれてきたようです。





グループ討議「なぜ森の手入れが必要か？」

森の作業で感じたこと・疑問に思ったことなどを一人ずつ書けるだけ紙に書き出したのち、グループ全員の意見をまとめていきました。同じ森に入ったのに自分とは違う視点や感想が出てきます。それらを自分のものとしていくことで、自らの視野も広がってゆきます。

『考えても答えが出ないたくさんの問題を、仲間とともに考え、意見を交換しながら答えを出せたのは、とても良かった。』ここでは敢えて答え合わせはしません。もっと知りたいという欲求を引き出し、仲間と語ることで答えを探し出す方法もあるんだと気づく場です。



小講義「日本の森を知る」

知識より優先して行なった体験で、「もっと知りたい！」という欲求を持った学生たちに、ここで初めて講義の時間が設けられます。森のはたらき、現状について知っておいて欲しい必要最低限の情報を提供しました。

『林業や里山の活動の中で、手入れをしないといけないとは聞いていたが、その理由がわからなかった。今回の説明で腑に落ちた。』

<2日目 森と私のつながり ～体験を五感で感じる>

小講義「ミクロの視点／マクロの視点」

人はみな、何かを始めると、どうしても目の前のことばかりにとらわれがちです。そこで、1歩2歩後ろに下がって遠くから、高いところに登って全体を俯瞰してみることの大切さを伝えました。

「Think globally, Act locally」の考え方を身に付けて森づくりに臨みました。

実技「森づくり・実践編」

『雨の中でびしょ濡れになりながら木を切り倒した時は、感動しました。』

1日目の森の手入れを踏まえて、2日目は計画的に森づくりに取り組みました。空模様を眺めながらの作業だったために森の手入れは早めに切り上げ、翌日の箸作りに使う材料として、スギの木を1本みんなで切り倒して森から運び出しました。



実技「樹から木へ」

『丸太を輪切りにするのが、こんなに大変なんて。』

重労働にへこたれず、元気な女子たちが中心となって作業が進みました。丸太を切り、ナタで割り、箸の材料がたくさん作られました。



小講義「手を掛けて森を育てる」

歴史・宗教・文化など、様々な視点から人と森の関わり方を見ます。

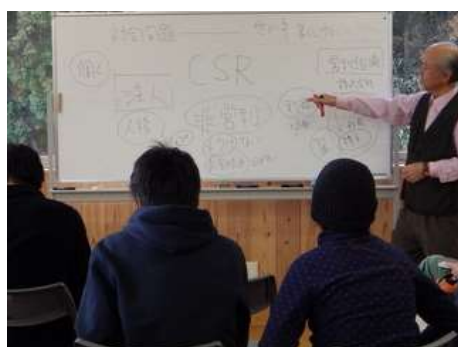
「日本では木を伐ることは考えても、その後の利用のことはあまり考えていない。」「木材を伐る人たちも、自分たちの切りやすいように伐っていて、顧客の細やかなニーズに答えられていない。」など、現在の林業が抱えている課題にも言及しました。

これからの森づくりは、地域の再生とは切っても切れません。『地域を変えるのは、よそのもの、わかもの、ばかものという言葉に、自信を得ました。』という学生の言葉に、明るい未来を感じます。

<3日目 森と私のつながり ～手を動かして考える>

実技「森のモノづくり」

2日目にみんなで伐り倒し、割った木を使って箸を作ります。中には箸作りを体験したことのある学生もいましたが、自分たちで伐った木で作るのは初めてです。『自分が使う用品を、もっと自分の手で作りたい。』『東京での生活で、いかに頭を使っていないかが分かった。』『木を伐る（破壊行為）と何かを作る（創造）ほど、人が熱中して快感を感じるものはない。』『モノづくりってスゴイ！色んなモノができる木もスゴイ！』箸を作るということを通して、様々な気づきが得られたようです。



特別講座

「NECの社会貢献活動を通してみる、社会で働くということ」

社会の役に立つことを仕事にしたいという学生は多い。一方で、お金を稼ぐということに悪いイメージを抱く学生は少なくない。持続可能な活動には正当な利益を得ることは必要なんだということ、そして株式会社などの営利組織もNPOも、元をたどれば自分たちの会社で社会的問題をどのように捉え、どのように良くしていくかである。そのためにCSRをしっかりと考えていかなければいけないんだということを伝えました。

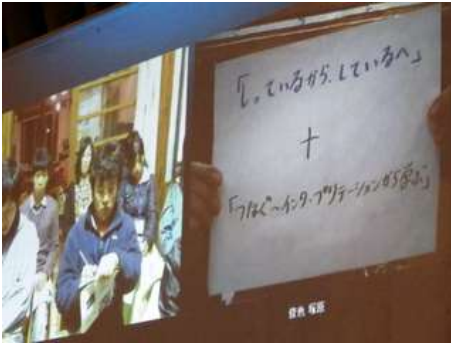
『やりたいこととやらなければいけないことは違う。社会の中で空いている穴を埋めることが必要なんだということに気づいた。』



見学「オークヴィレッジに見る、森林資源の利活用」

『普段何気なく木の椅子や机を使っているが、自分で箸を作ってみて、この状態にするまでにいろんな技術や考えに基づいて作られているんだなあと思った。』『家具は100年、建築は300年使えるように作るというこだわりで感動した。』

未利用資源を活用したアロマオイルの抽出プラント、大工さんの刻み小屋、家具・小物のショールームを見学し、持続可能なモノづくりを目指すために「再生産可能な木という素材」の特性を理解し、長く使える技を活かしたオークヴィレッジのモノづくりの理念を垣間見ました。



skypeで特別講座

「くりこま高原自然学校に見る、東北の震災復興への取組」

東北の復興支援も時間の経過によって必要とされることが変わってきています。そしてまだまだ多くの支援を必要としています。

『今から自分が東北支援に行っても遅くはないのか?』『ボランティアが足りないと知って、今からでも行こうと思う。』遠くの出来事と思っていたことを、自分事として捉える学生たちの姿がここにあります。

小講義「IT（情報技術）×EE（環境教育）＝□を考えよう」

持続可能な社会のために、ITの可能性は？ 学生たちから出た意見をまとめてみました。

IT技術と環境教育を掛け合わせると、何ができるか？

● IT×EE＝興味→行動

森人講座3日目の夜の塚原さんとのskype講座を聞いて、少しでも現在の被災地の様子を知れた事で、また被災地に行きたいという気持ちが芽生えた。現場で活動している人とリアルタイムに言葉を交わす事はテレビや新聞などの情報より伝わってくるものがあると感じた。だから今晚のような環境教育の場で、いろんな分野の人の声をリアルタイムに聞ける機会が増えれば、多くの人の好奇心、冒険心を刺激して、たくさんの社会貢献運動につながると思います。

● IT×EE＝森人

ITによって人と自然とが繋がり、EEを広めていくことで多くの人達が、情報を共有し、より良い方向へ行こうとすることを願い、森人になりました。

提案として、今現在、私たちは多くの情報に囲まれて生活しています。そして、携帯電話という便利な道具を全人口のほとんどが持っているのが現状です。たとえばスマートフォンを利用して、スライドするごとに森（荒廃地）に木が一本植えられ、世界中の人達何人がスライドしたら、これが、1円でも10円でも、それが森やそこに住む人達に還元されるような社会にしたい。携帯電話という人の身近にあるもので、遠い存在だったもの、興味がなかった環境というものが、身近にある環境をITで実現してもらいたいです。世界中の1人1人が、森の人になって環境をみんなで共有したいです。

● IT×EE＝未来に繋がる行動

ITとは情報テクノロジーである。そのため現代日本には大きな影響力を与えられると思う。

それを利用し、市民に現代の環境問題、その現状、そして今後の私達の未来にどのような影響を与えるかを知ってもらうことができる。しかし、今までは知ってもらったとしても、知っているだけで、実際には何も変わっていないと思う。なぜなら、環境問題のことは知っていて意識があっても、何をしていいのかわからない、自分には何ができるかわからない、他人事のように思っている人が多いと私は思

う。なのでITが環境に関する体験イベントを企画または、それらを市民の人達にアピールし、参加してもらうことで多くの人達の考え方を変えることができ、自分に何が出来るかを知ってもらうことができる。このように多くの人達が少しでも、自分にできる環境に対する行動をすれば、より良い未来につながっていく。

●IT×EE

この2つのつながりは、自分の身近な環境のことを知り、また遠くの環境を知ることにもつながると思う。

私は、NECとキープが協働して行われたプログラム（NEC世界子ども自然クラブ）にボランティアとして参加したことがある。4～6年生の子どもたちがスカイプをつかって、台湾、タイの小学生とつながり、自分たちの身の周りの環境を伝えるといったものだ。そのために子どもたちは、改めて自分の身の回りの自然に目を向けて、たくさんの発見をした。また、相手国の自然に住む動物たちや、はえている植物を知ることができた。だからこそ、IT×EEは、子どもに自分の身近な自然に目を向けさせ、かつ遠くの自然の理解につながると思う。

●IT×EE

＝生活をふりかえるきっかけ

EEでは、自然体験がメインになると思うが、そこでITの要素を入れることで参加者が日常生活を振り返るきっかけになると思う。例えば、私は普段インターネットをPC・スマホでかなり使用しているが、今回のプログラムのようにどこかへ出かけたりすると利用頻度はとても下がり、日常でネットやSNSに依存していることに気づかされた。

＝距離をこえた共有

ITとEEと一緒に活用されると、EEの情報がもっと発信されたり、情報を求める人に届くようになったりする。今回の森人でskypeを利用し、くりこまや清里と顔を見ながら話ができたと、距離をこえて思ったことや話をシェアできる。

以上のように大きく2つのことを考えたが、やはり直接体験はその場でしか得られない、貴重なものだと思う。ITにも限界やデメリットはあるので、ITとEEの良いところをミックスすることが大事だと思った。

●IT×EE＝クラウドEE

クラウド技術やSNS（facebook、Twitterなど）を用いて、情報の共有、ネットワーク（組織外）づくりとその維持を促進させる。環境教育について、質の向上や均質化（下限値の底上げ）をする。イメージ的には、日本列島上空に情報の倉庫があり、木が根っこから水を吸い上げるように情報を吸い上げ、また各地にシャワーのように情報が降っていく、といった具合だ。

田舎の過疎地と都会では、ITに関する知識、技術の差（以下IT格差）は著しい。インターネットが使えない、ということになれば、遠方の情報を即座に共有するのは難しい。IT格差を埋めていくことが第一の課題だ。IT格差を埋めることが、教育の質や均質化に貢献すると考えられる。PCやインターネット、アプリケーションやサービスを親切丁寧に教えてくれる（情報教育してくれる）会社や団体があれば、そこに協力してもらうのが簡単であろう。無ければクラウドファンディングで企画を乱立

させ、資金が集まったものを基点に組織を作っていくことが挙げられる。

以上のことをまとめるとクラウドEEでは、教育の質の向上や均質化が期待でき、第一の課題はIT格差を埋めることである。

● IT×EE×観光産業

ITの強み“information”を生かす。

EEの強み“緑の人を育てる”を生かす。

観光産業の強み“人を惹きつける魅力”を生かす。

IT以外の2つは、情報力を欲している。またこの2つは深く関係していけると思う。それを繋ぐのがITだと思う。EEの情報、観光産業の情報、どちらか検索した時に、それに関係するもう片方が同時にヒットすればいいと思う。

● IT×EE＝「より良い未来」

環境に対して興味、関心を持った人たちが多くなれば、地球規模で起きている環境破壊を次第にストップできると思います。そのため、ITの力を使った効果的な宣伝と、正しい知識を与える場所として多くの人々に影響を与える「IT×EE」は、より良い未来へと繋がります。個人レベルで意識が変われば、それは社会を変えうる十分すぎる力となる。そして私は、公立、私立問わず小学校から中学校の若い世代に、もっと「環境」ということを広めていくべきだと感じました。

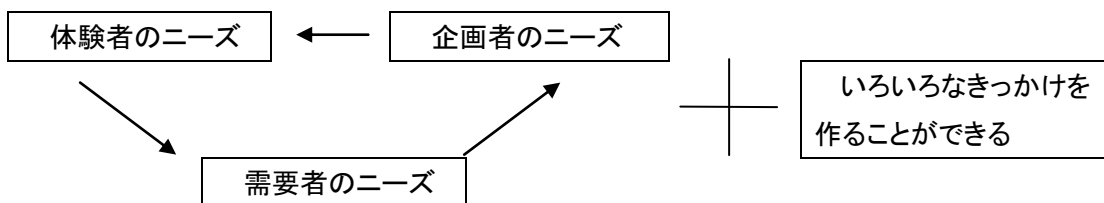
● IT×EE＝未来

ITは今私たちの生活において欠かせないものとなっています。その一方で、EEは欠かせないものだと思います。その2つが未来を作っていけると思うし、その可能性を見出していく必要があると思います。ITによってEEの情報や、EEとは何かを知らせたり広めることができると思います。

● IT×EE＝木材流通ルートへの提案

日本の森林は、伐採される事が第一に考えられていて、伐採された木をどのように活用していくかという点についてはあまり考えられていない。伐採業者は、需要者の細かなニーズを拾いあげきれず、需要者は自分達が欲しい木材の形や種類を探すが、容易には出来ていない。

そこで、間伐や除伐などをする際、作業体験をしたい人達を集めて、実行したら、その発生した木材の形や種類を、インターネット経由で発信し、その木材を必要とする人達に渡す仕組みを作る。そうすれば、作業体験をした人達は、自分達の行った作業が誰かの為になっているという実感をしてもらえるのではないか。そのために、ITは必要になってくると思う。



● I T × E E

環境教育（E E）といっても幅が広いしその人1人1人にとって求める、又は響く環境教育の内容は違うと思う。そこで環境教育提案アプリを作る。

そこでは対象者にいくつかの質問に答えてもらい、それをヒントに、こちらからイベント紹介、組織紹介（動画等で小学生にわかりやすく）などを行う。アプリでなくてもHPなどでもいいかもしれない。小学校などで導入してみるといいかもしれない。

● I T × E E = 笑顔

楽しくなく、我慢しなさい、というエコ活動だと長続きしない。（省エネのため 28℃ =暑い、辛い）「環境に良いから」と言うだけで、なぜそれが環境に良いのか教育されていないと活動に移せない。環境活動がしたい！と思ってもネットワーク（SNSやHPなど）がないと行動できない！
⇒だからネットワークと教育と笑顔が必要！

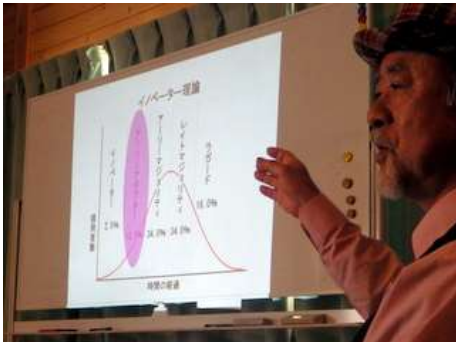
● I T × E E = 森林管理

- ・ I Tによる森林の木の個々の情報を管理（バーコード・I Cタグ 等）
- ・ G I Sを使ったマクロな視点での計画作り
- ・ 市民1人1人が森林管理の重要性や環境に対する自身の立ち位置を意識し、行動できるようにするE E
- ・ I T × E E、例えば植樹活動や整備を行ったらそのログを木毎に個別でログとして蓄積、市民1人1人が自分の活動や手入れした木を確認できるように見える化
- ・ 活動のログや木の個別情報から次回の活動計画の立案、木を買いたい人がこれらの情報を参照できるようにして「木のショールーム」として活用できるようにする

<4日目 次につながるもの ~自分と対話する~>

スライドショー「4日間の活動をふり返って」

森に学び人に学んだこの4日間。あつという間の4日間を、写真でふり返ってみました。



小講義「森人流、事を起こす・輪を広げる」

この講座で得たものは、次の行動に移してこそ活かされます。「素人が何十・何千・何万集まったら、それはプロ以上の力を発揮するんだ。」「先頭切って走るイノベーターだけでなく、次につながるアーリーアダプターの役割も重要なんだ。」学生たちをその気にさせる言葉が次々と飛び出しています。

『知識ばかりでなく行動することの大切さ、そしてそれを他の人に広めていくことが重要だと知った。』



実技「ソロ ~たった一人でふり返り」

この講座で一番大切にしている時間です。この4日間の講座を通して学んだことを自分の中でじっくりと消化する時間となります。

小雪のちらつく中、寒さに負けず森の中でひとりふり返っています。講座に参加して終わりとせず、「知っているからしている」人へと変化する時間です。



全体のふり返り ~閉講式

午前中の一人でのふり返りを、全体で共有する時間です。

話している間に涙してしまう人、他の人の話に涙が止まらなくなってしまう人もいました。ありのままの自分を受け入れてくれる仲間、バカなこともマジメなことも朝まで語り合える仲間たちと過ごす最後の時間です。

あまりに語るが多すぎて、最後の集合写真を撮る暇もなくなっていました。再会を約束して、駅へと帰路を急ぎました。

■ Aコース:オークヴィレッジ／森林たくみ塾受講生(27期生)の感想です。

※文章の一部を抜粋、加工しています。

「4日間のこの講座を通して『獲得したもの』は何ですか？」

MK (国際自然環境アウトドア専門学校)

私が獲得したのは、森を見る視点と、森の楽しみ方のコツです。今までの私は森の中に入っても、その森が良い状態なのか、わかることが出来ませんでした。しかし、この講座で、森と関わり、触れ合うこととは何かを考えていくうちに、自分なりに森を見る目が養われたと思います。

もう一方の森の楽しみ方のコツは、1日目から4日目になるまでの木との触れ合いで掴むことが出来ました。ただし、楽しみ方といっても難しいことはなにひとつありません。森の中に入って、木に巻き付いているツタで遊ぶ、木を切る、切った木で薪を作る、工作用に切り出していく、森に自生している植物で香りの良いものを嗅いでみるなどほとんどの人が簡単にやれるものです。しかし、それこそが自然を楽しむためのコツなんだと感じるようになりました。シンプルだからこそ、何度でも楽しめる、いつでもどこでも、誰でもやれる。だけど、ひとつだけ注意をしなければいけないです。それは森を楽しみたいという気持ちを持つことです。それだけ持って自分が能動的に動けば、自然も応えてくれるのではないかと、思います。

SS (名城大学)

今回の講座に参加する前は、ひどく緊張していました。しかしメンバーはおもしろく、みな環境に対する意識がとても高くメンバー同士で話すだけでも勉強になり、この仲間に出会えたことが本当にうれしいです。また森での実技は基本なものも教えられず、自分達で考え行動することが大切だということがわかりました。そのことによって新しい疑問が生まれ、それをみんなで共有することによって知識が深まり、自分の考えも深まっていきました。そして環境問題は知っているだけではなく、行動することが大切であり、その最初の一步を踏み出すには勇気がいるけれども、自分のやりたいことは継続していればいつか結果がついてくるので、まずはその一步から踏み出してみようと思います。

EG (立教大学大学院)

今回の講座で私が得たものは、大きく2つある。ひとつ目は森の見方、2つ目は、これから自分がやるべきことを考える機会だ。ひとつ目の森の見方は、地面まで光が届き新しい植物が育てる山かそうでない山か、違いの見方が分かったという意味だ。今まで山や森はたくさん行く機会があったが、今回はこの先にあるだろう川を想像して実習できた。いい川にはいい森林があり、その先にいい海がある。そのつながりを意識しながら、私も実践に加わっていきたい。2つ目は、特に佃さんの話を聞き考えたことで、「やりたいこととやるべきことは違う」という話が印象的だった。オークの成り立ちや、佃さんの人生の転機の話聞き、私がやりたいことや周囲に足りない役割がないか考えるきっかけになった。私の今関わっている活動の足りない部分を少しでも補っていききたいし、ミッションを持った活動を人に伝えていきたい。

森人の講座で多くの人と出会い、話や作業を共にしてきたことで上の2つだけではないたくさんのもので得た。関係者と一緒に参加した仲間へ感謝します。ありがとうございました。

MN（東京農業大学）

この講座を通して、人との繋がり大切さを身を持って感じた。自分にとって森について語り合える相手がこんなにも近くにたくさん居て、これも森がつくってくれた繋がりだと思った。ここでたくさんの人と出会ってその人から今度はまた違う人というようにネットワークが生まれて、自分の知らない世界を皆にみせてもらった。森ひとつ皆の見る方向や考え方が十人十色で、自分の狭かった世界を森が私に見せてくれた。そのお陰で大きなまだ見ぬ世界を見ることが出来た。この講座はひとつの視点しか持てなかった私に四方八方様々な角度から物事を見る楽しさを教えてくれた。そして尚且つ、森について語り合える仲間に出会えたことが一番私にとってのプラスになったことである。

この様な機会を作って頂いたNECの方々、たくみ塾の方々に感謝を申し上げますと共に、自分の世界を広げてくれた27期の皆に心から感謝を申し上げます。

KI（龍谷大学）

この講座を通して自分が獲得したものは「興味と焦り」でした。自分は今まで、それなりに色々な体験をしてある程度の知識は持っているつもりでいたけど、今回の講座で多くの同年代の人達と話して、皆のバイタリティと知識量にただただ圧倒されるばかりで、密かに悔しさと「なまけてたらあかん！！」という焦りを感じました。同時に、皆の様々な体験の話を知っているうちに「自分もこんなことやってみたい！！」という興味も湧いてきました。なので、森人から帰ったら早速熱が冷めないうちに（これ大事）、何か自然に触れることができ、一定期間継続していく学びの多い活動を始めたいと思います。

KY（東京都市大学）

森のパワーの偉大さを知った。森に入ると心臓がバクバクし、恐さを感じたくらいだった。この感動を多くの人に知ってもらいたいと思った。そのためにも今回得たことから好きなことを追求し、みんなに発信していく力を身に付けようと思う。

好きが高じて、様々な活動をしている人がたくさんいた。そういう人になりたいと思う。普段は浅く広く考えて、学んでいることがほとんどで、ネットで知ることも多く、実際に山を見て、自然を感じてということが少ない。今回の企画を通じて、実際に自分の目、手、耳、足・・・で感じて、考えることの大切さを知った。この想いを東京に戻っても、たやすことなく、次へ活かしていかなければと思う。

NN（関西大学）

森の人づくりを通して僕が獲得したものは、大きく分けて2つあります。ひとつ目は、森の美しさです。森に入って作業をしていくと無心になって木や草を刈っていることに気がつきました。そこで僕が気づいたことは、森というのは人間を無心にさせ本来の自分をさらけ出せる力があることです。もちろん、景観的にも森というものはキレイに写るかもしれませんが、それ以上に人間を本来の姿にさせてくれる美しさがあるんだとわかりました。そして2つ目は、人は協力することで何倍もの力を発揮することです。一人では到底なしえない問題でも、みんなで協力し、考え、行動することで問題が解決する場合があります。たとえば、植林の活動でも一人で百本の木を植えるのと、百人で百本の木を植えるのでは作業効率が明確に違います。仮にその百人が素人であっても、その人たちが環境に興味を持ち新たな力となることが多々あります。作業効率という点だけでなく、繋がりを増やしていく点でも素晴らしいことだと思いました。この2つを通じて得たものをこれからの活動の場で広めていきたいと思っています。

KK（関西学院大学）

私がこの講座を通して得たことは、まず一番に森に関する知識である。今、日本の森の96%が手入れすべき森であるにも関わらず、放置されていて、100人に3人という少ない割合の林業従事者で、国土の7割を覆っている森を管理しているという状態を知った。一度手を入れた森は、手を入れ続けて、循環させる必要があることを学び、それを森の中での作業と、講義の中で、「腑に落ちる」ことができた。森の中で、手入れの作業をしていたが、森の問題や、手入れする目的を、しっかり知ることによって、この一本の木を切るというちっぽけなことが、森が元気になることにつながるのかなと思えるようになった。私は将来、小学校教師を目指しているが、これからの未来を生きて、社会を支えていく子どもたちを育てていくことになる。ぜひ、この体験を子どもたちに伝えたい。小学校の授業では、あまり林業のことは学ばないけど、その少ない時間の中でも、工夫をして授業を行なえたらいいと思う。正直、森や林業のことは、まだ難しく、理解できていないことが多いけど、その気持ちを大切に、まだ体験をしていない子たちに伝えていけたらと思う。そして、その一人一人の力が、森の元気につながればいいな。

RS（神戸大学大学院）

この講座を通して私が獲得したのは、「森が好き自分自身」だと思います。森が好きと言いつつも、どこかで無意識に「経済的に大丈夫?」「本当にやっていけるの?」といったブレーキをかけていました。また、自分の専門外である森林に手を出すことにどこかで後ろめたさのようなものも感じていたように思います。しかし、今回この講座を通してたくさんの友人や、森を通じて暮らす先輩と知り合うことができました。また、机上でなく森を使うということを経験的に知ることが出来ました。特に、たくみ塾の「木工」という分野は今まで自分が木を使うことに対して考えが浅いことを気づかせてくれたと感じています。こうした体験の中で、具体的にどうすれば自分も木や森に関わった暮らしができるか必死でシュミレーションしている自分に気がつきました。やはり自分は森と生きていきたい、それを再発見できたことが自分の最大の収穫です。

AN（OG・学芸大学）

私は今回の講座で大きく4つのものを得ました。まず1つ目はこれからの視野を広げたいフィールドが広がったことです。同じ環境教育に関心を持つ人でも、アプローチ法や活動内容が様々で今後やりたいことが増えました。2つ目は現場の重要性を学んだことです。私は独学で林学を学びましたが単独の知識のままでは現場では全く通用しないと分かりました。3つ目は来年から始まる仕事の姿勢について考えたことです。就職は目標ではなく始まりなのだと思います。林業に携わる身として、組織の中で埋もれるのではなく外との繋がりを大切に、多角的に日本の森林について考えられる人になりたいです。最後に4つ目は「仲間」です。私は今回OGとして参加しましたが、前回は引き続き、人との出会いがもたらすパワーのようなものを感じました。ずっと付き合っていきたいような仲間が全国に持てたことをとても嬉しく思います。ありがとうございました。

RT（OG・関西大学大学院）

今回私は、オークヴィレッジにOG生として参加させていただきました。明確な目的「間伐のこと、

森林のことについて学びたい」を持って参加することができ、OG生ではあるがたくさんの発見・学びをすることができました。スタッフの方はもちろんですが、参加生たちの、個々の情熱、知識にまた感動し、NEC森の人づくり講座の「人」の素晴らしさに改めて感動しました。ここで私が伝えたいのは、この講座の人脈ネットワークのすごさです。知識・経験も他ではできない貴重なものですが、高い志を持った人たちと生活を共にし、環境のこと、将来のことについて話し合うことは人生の財産であると思います。NECさんのIT力はここでも十分に発揮されていると思います。どんなことでも、「繋がる」というのは切っても切り離せないことで、NEC森の人づくり講座では、みんなが繋がり、講座終了後も助け合っています。これからも続く講座であれるように、私自身も高い志を持って進んでいこうと思います。

YO (OG・東京家政大学)

今までの自分が考えていた森と木材に対する考え方の変化が獲得したものとして一番大きい。森の手入れをしっかりと、植林をたくさんすることで森林破壊を防ぎたいと思っていたけど、木も年をとる。土の活力や生命の循環を無視していたことに気づいた。育てた木を、木材として使っていくことの重要性に気づくことができた。また、自分が正しいと思っていることを興味のない人や知識のない人にしてもらおうことは大変であること、自分からやったり、考えてもらったり…。そういう行動に移してもらえるようにアプローチすることの大変さも知った。考え方が変化したことで、自分のこれからの行動も考えていきたい。今までの価値観とは違う自分で行動していく必要がある。27期のみんなからももらったパワーを糧に、今度は自分からパワーを出していきたい。

Bコース： キープ・フォレスターズ・スクール(山梨県北杜市高根町清里)



■ 講座のねらい

「インタープリテーション～人と人・人と自然のつなぎ方」

環境問題解決の第一歩は、コミュニケーションから。

自然と人、人と人をつなぐ「インタープリテーション」について学びながら、より良いコミュニケーションのあり方を考えます。

■ 講座中に伝えたいこと

- ① 環境教育について学ぶ（企業やNPOにおける環境教育の取り組みについて知る）。
- ② インタープリテーションの考え方や手法について学ぶ。
- ③ 自分自身と環境教育との関わりについて考える（自分なりの言葉で説明できるようになる）。
- ④ 全国の仲間とのネットワークを作る。
- ⑤ 自分自身のねらいを達成する。

■ スケジュール

1日目 11月9日(土)

- 13:00 開講式
- 13:20 野外に出る準備
- 13:30 お互いを知り合う時間／アイスブレイキング (関根)
「ラインナップ (移動時間順、誕生日順)」「マツボックリでスプーンリレー」
「ストッキングボール」
- 14:25 環境教育施設の見学①八ヶ岳自然ふれあいセンター (佐藤)
- 14:45 インタープリテーションの体験①ヤマネをテーマにしたガイドウォーク (佐藤)
「富士山」「ウラジロモミの匂い」「ドングリ (ミズナラ)」「同じものさがし (森のエビフライ)」
「スキヤキハイク」「動物さがし」「アニマルパスウェイ」
- 16:10 環境教育施設の見学②やまねミュージアム (佐藤)
- 16:40 休憩・チェックイン
- 17:00 目的の共有化・自己紹介 (関根)
 - ・スケジュール&講座のねらい説明
 - ・自己紹介シートの作成 ①プロフィール ②参加動機 ③インタープリターのイメージ
 - ・記入後に、小グループで①②③を話題に自己紹介
 - ・自己紹介シートの作成 (続き) ④自分のねらい
 - ・④について、全員で紹介しあう (自己紹介シートを壁に掲示)
- 18:00 夕食
- 19:15 講義：環境教育概論 (関根)
「環境問題解決の3つの方法」「環境教育の“環境”とは?」「なぜ“関係”の問題なのか?」
「持続可能な社会とは?」「最も恐れるべきこと」「環境教育の反作用」
- 20:00 1日を整理する時間
- 20:15 終了 (以降、自由交流会)

2日目 11月10日(日)

- 08:00 朝食
- 09:15 インタープリテーションの体験② (関根)
「カモフラージュ」「私の葉っぱはどれでしょう?」「葉っぱのラインナップ」
「葉っぱのスライドショー」「一本の枝物語」「一本の樹をめぐる詩」
- 11:45 休憩 (オプション：薪ストーブで焼きマシュマロ／長田)
- 12:15 講義：インタープリテーション概論 (関根)
「インタープリテーションとは?」「インタープリテーションが伝えること」
「インタープリテーションの定義」「インタープリテーションの6つの型」

- 12:50 昼食
- 13:50 実習：プログラム作り／オリエンテーション（関根）
- 14:10 実習：プログラム作り／グループ作り（関根）
「グループで大切にしたいこと」「グループ名」を決める
- 14:30 実習：プログラム作り／素材探し
- 15:00 実習：プログラム作り／準備①
- 16:30 実習：プログラム作り／補講（プログラム実施のためのチェックリスト）
- 16:50 実習：プログラム作り／準備②
- 18:00 夕食
- 19:30 インタープリターの部屋（スタッフへの質問コーナー）
- 20:15 1日を整理する時間
- 20:30 終了（以降、自由交流会）

=====

3日目 11月11日(月)

=====

- 07:00 実習：プログラム作り／準備（任意）
- 08:00 朝食
- 09:00 実習：プログラム作り／リハーサル
- 10:00 実習：プログラム作り／実施と相互評価
 - 1) Kiyosato Golden Egg Ranger (KGER) 「ポキポキポッキー枝相撲♪」
 - 2) あひあひ「恋のあひあひ」
 - 3) ハッスル「獣のきもち」
- 11:15 休憩
- 11:30 実習：プログラム作り／フィードバックの記入
- 12:00 昼食
- 13:15 実習：プログラム作り／評価会
 - 1) 自己評価
 - 2) フィードバックの読み合わせ
 - 3) プログラムシートに改善点を加筆する
- 14:00 休憩
- 14:15 実習：プログラム作り／ふりかえりとわかちあい
 - 1) 「インタープリテーション」「グループ内のコミュニケーション」個人でふりかえる
 - 2) 実施グループで共有する
 - 3) 全体で共有する
- 15:15 休憩
- 16:45 実習：IT（情報技術）とEE（環境教育）を考える（関根）
- 18:00 夕食
- 19:30 s k y p eによる特別講義（塚原俊也さん／くりこま高原自然学校）

20:45 インタープリテーションの体験③ナイトハイク／1日を整理する時間（松尾）

21:40 終了（以降、自由交流会）

4日目 11月12日(火)

08:00 朝食、チェックアウト

09:45 補いの講義・質疑応答（関根）

「実習：流れ星」「コミュニケーションで伝わるもの」「より良いコミュニケーションとは？」

10:30 休憩

10:45 講座のふりかえり・わかちあい

12:00 昼食

13:00 閉講式

14:00 終了、解散

■ プログラム報告

<1日目>



開講式

冬の気配を感じるようになった11月の清里に、全国各地から11名（新規参加10名、OG 1名）の学生が集まった。いよいよ「NEC森の人づくり講座2013・秋」Bコース（キープ・フォレストーズ・スクール）の幕開けだ。



お互いを知り合う時間（アイスブレイキング）

アイスブレイキングとは、参加者の不安や緊張を氷（アイス）にたとえ、その氷を壊して（ブレイク）、参加者同士やスタッフとの打ち解けた関係をつくること。外で身体を動かしていくうちに、自然とお互いに声を掛け合えるようになった。

環境教育施設の見学～インタープリテーションの体験①

キープ協会が運営する「山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター」は、周辺の自然情報を発信している見学施設。来館者とスタッフとの生のやり取りを見学し、インタープリターの現場を肌で感じた。

「インタープリテーションの体験」では、実物やぬいぐるみを用いて、季節の移り変わりを感じたり、野生動物の生態について知ることができた。その後、樹上性の動物が行き来できるような車道に架けられた橋「アニマルパスウェイ」や、天然記念物ヤマネを紹介する「やまねミュージアム」の見学を通じて、キープ協会が取り組む生物多様性の保全に関する活動について解説を受けた。



目的の共有化・自己紹介

この時間では、自己紹介と合わせて、この講座で得たいこと、持ち帰りたいことを改めて確認し、一人ひとりが全員に向けて発表した。



講義：環境教育概論

環境教育は、様々な関係の再構築を目的としていること人々が関心や感受性を獲得するために、それを促す役割が必要なこと、などを学んだ。皆熱心に耳を傾けていた。

<2日目>

インタープリテーションの体験②～講義：インタープリテーション概論

落ち葉降り積もる森の中で、インタープリテーションを体験。自然を楽しみながら、グループのコミュニケーションが促されたり、自分自身の感性に気づいたり、インタープリテーションがもたらす様々な効果を、体験を通して知ることができた。



実習：プログラム作り／オリエンテーション～グループ作り

インタープリテーションの定義やプログラムの構成を学んだ後は、いよいよ自分たちでプログラムを作る実習がスタート。プログラムを発表するという課題と合わせて、グループの中でのコミュニケーションを意識することも、この実習の目的。グループ名を考えたり、グループで心がけたいことを話し合う中で、グループとしての意識を高めていく。

実習：プログラム作り／素材探し～準備

この実習では、すでに紹介されているプログラムをアレンジするのではなく、全くゼロからプログラムを組み立てていくことが条件として提示される。野外と室内を行き来しながら、時に笑い、時に悩み、あっという間に時間が過ぎていく。

<3日目>

実習：プログラム作り／実施と相互評価

準備やリハーサルを重ねて練り上げたプログラムを、いよいよ発表する時間。台本通りには進まない難しさを感じつつも、インタープリテーションの面白さを、インタープリターの視点から体感することができた。

発表後には、お互いに感想や改善点をメモし、これを材料に、次回再び実施するとしたらどのような改善ができるか話し合った。



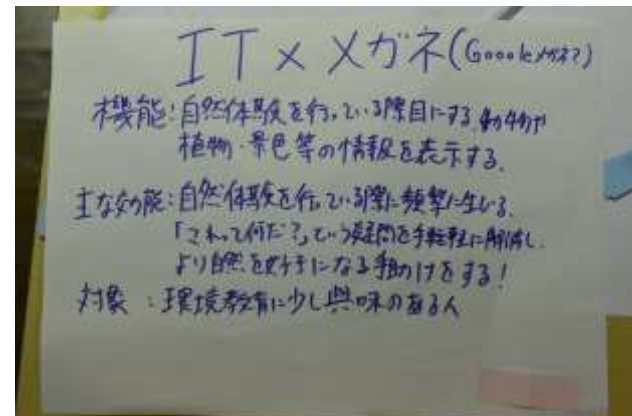
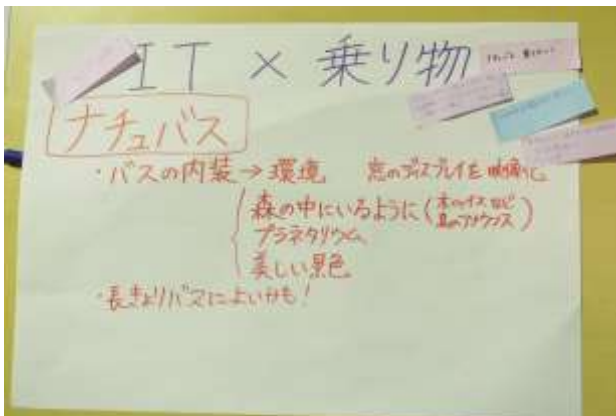
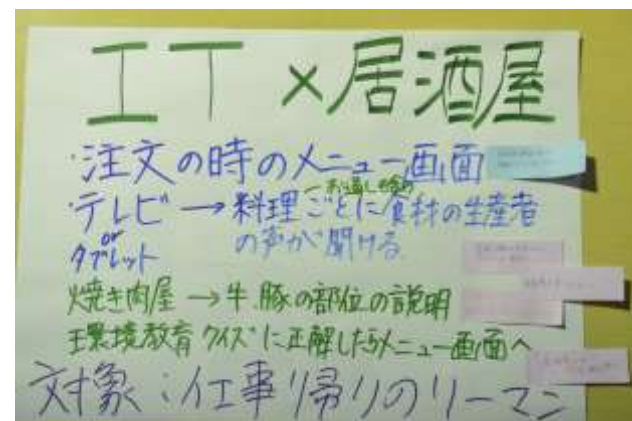
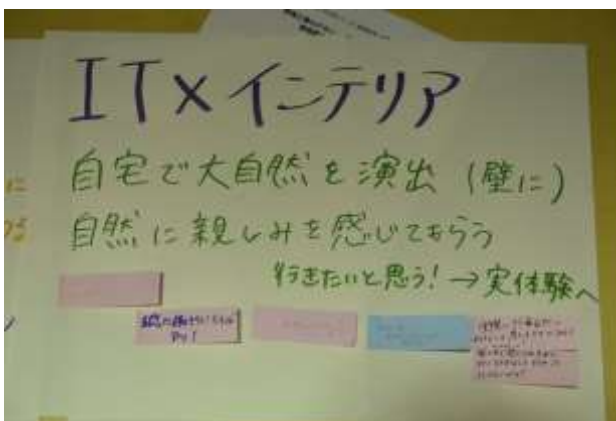
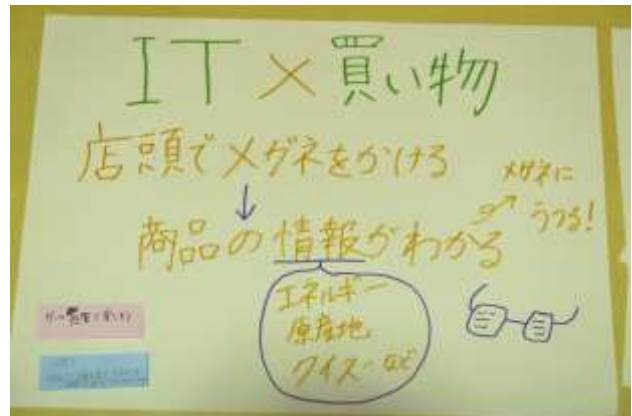
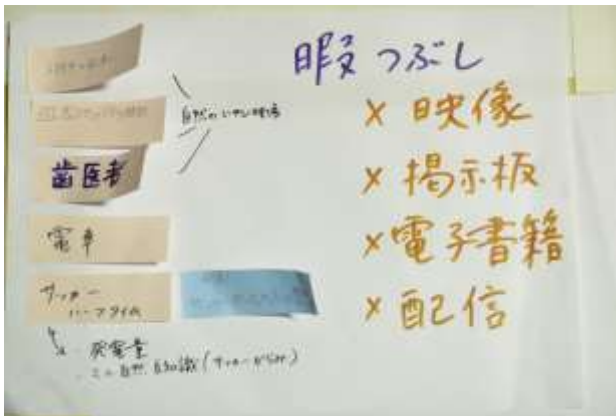


実習：IT（情報技術）×EE（環境教育）を考える

（環境に関心のない・知る機会のない人に、環境教育を広めていくには？）

環境教育の普及はまだまだ発展途上。この時間は、身のまわりですでにITが活用されているモノ・コトを通して、環境に関心のない・知る機会のない人に、環境教育を広めていくことはできないか、環境教育普及のためのアイデアを出し合った。日常のあらゆる場面や場所で、環境について知る・機会はある！熱を帯びた企画会議となった。

各グループで出された意見



skypeによる特別講義

くりこま高原自然学校の塚原俊也さんによる、skypeを使った特別講義。同時開催しているAコース（オークヴィレッジ／森林たくみ塾）の参加者と一緒に、塚原さんのお話を伺った。塚原さんが考える環境教育や冒険教育の意味、震災復興への取り組みや被災地の現状など。画面越しとはいえ、塚原さんの言葉は、一人ひとりに深く刻まれたと思う。



インタープリテーションの体験③ナイトハイク

これまで仲間と共に過ごしてきたが、この時間は、じっくりと自然や自分と向き合う時間。月明かりに照らされた森を抜けて、星空の下、草原に一人になって寝転がる。お互いに何も語らない。でも自然は雄弁に語りかけてくる。

<4日目>



講座のふりかえり・わかちあい～閉講式

最終日は、これまでの時間で得たことをふりかえり、整理する時間。これまで書き留めた記録を読み返し、この講座で学んだことから、今後の自分に活かしていきたいことを、書き綴っていく。



学びから行動へ。この講座はゴールではなく、あくまでもスタート。ここで出会った仲間とのつながりは大事にしつつ、それぞれの場所で環境教育を支える力になってほしいと、私たちスタッフは願っています。

いつかまた清里でお会いしましょう。それまでどうぞお元気で！

■Bコース:キープ・フォレスターズ・スクール受講生(27期生)の感想です。

※文章の一部を抜粋、加工しています。

「4日間のこの講座を通して『獲得したもの』は何ですか？」

HY (女子栄養大学)

4日間、私が考えていた環境教育と違った視点の環境教育の在り方を学びました。今までの私は、「地球温暖化、森林伐採」など、負の面を導入として自然環境を守る必要性を伝えていくことしか考えていませんでした。しかし、この4日間、たくさんの自然に触れました。実際に自然の中で過ごすことで、その楽しさや大切さを実感しました。これが大切だと気づきました。ただ情報や知識ばかり並べても、学んでいる方は実感が湧かず、実際の行動に移すことは少ないです。しかし、自然体験を通して「楽しい！」と感ずることで学ぶ人の心に訴えることができるのだとわかりました。知識として頭に訴えかけるだけではなく、五感に訴えることが必要だと気づくことができました。

私は将来、家庭科教員になりたいと思っています。家庭科では中学・高校と環境の分野を学びます。興味・関心のない授業は生徒たちには伝わりません。教科書に載っている事実を淡々と伝えるのではなく、生徒が「自然って楽しい、守りたい」と思えるような授業を行いたいと思います。教室での講義だけではなく、校庭に出て実際に自然に触れ、五感を刺激し、生徒自らが体験することで気づかせるような授業を考えていきたいです。

MN (神奈川大学)

今回参加した大きなテーマは「伝える」を学ぶことでした。講座を通し、伝えることの難しさと同時に、楽しさに気づきました。森の歩き方ひとつとっても本当にたくさんの気づきがあり、キープの皆さんがそのヒントをくれました。伝えることは教えることではなく、気づかせることです。その中で様々な見せ方をして、ヒントを提示していくことの面白さを感じました。

今回参加するにあたり、知らない人同士で、誰もが緊張していたと思います。その中で感じたことは、自分たちの環境をいかにしてつくっていかれるかということと、人とのつながりの重要性です。たくさんの体験を行い、交流が深まっていく中で、1人1人の気持ちや考えが開示されていきました。そういった環境が形成されることにより、よりみんなの考えが出やすくなり、有意義な場になると思いました。環境教育にどう携わっていくかを考えると同時にそういった場をつくっていかれるようになりたいと思います。

MT (立命館大学)

私にとって大きな収穫は、環境教育の考え方に広がりを持たせることができるようになったことです。講座を受ける以前の私は「環境教育」と聞くと、人に自然の大切さを「教える」こと、特別な知識や技能を用いて特定の人にしかできない「特別なモノ」のように据えているところがありました。しかし、清里でのインタープリテーション講座を通して、何かのアクションを起こしていく原動力は、経験やその時の「好き」「楽しかった」「嬉しかった」という気持ちに他ならないと実感したことで、きっかけづくりも立派な環境教育であることを痛感しました。

具体的に今後、自身がどのような形で環境教育活動に関わっていくか。先ず、残り少ない学生生活の

間に、ボランティア活動をしている国際NGOで防災教育に関わる教材づくりを行うので、早速清里で学んだ、双方向型の学び、主体性を刺激する、インタープリテーションに積極的に挑戦していきたいと思います。そして、来春からの社会人生活の中では、環境教育の普及を一般消費者のみならず、企業内においても定着していけるようなITシステムの開発を将来の目標に頑張っていきたいと考えています。これらをしっかりと実現する上でも、自分自身が自然豊かな山で育ち、遊んだ経験、自然が好きだという気持ちを大切に、前述の通り、何か特別なプロジェクトをしていなくても、私の何気ない日常の会話や行動を通して、周囲の人に「自然っていいな♪」と共感してもらい、自然に興味関心を抱くような影響を与えられる人になっていきたいと思っています。

HY（愛媛大学）

プログラム作りにおいて「自分らしさ」、「個性」を大切にしながら楽しむことが重要だと気づきました。チームの仲間の個性を大切に、それに合った役割分担をすることで、全員の良さが引き立ちました。また、実施者が緊張していると参加者にも伝わると思うので、実施者側も楽しむことが大切だと思いました。そして、話し合いをする際も相手の意見を否定するのではなく、みんなが話しやすい場を作ることでチーム内での団結力や信頼感、安心感が生まれ、自分の力を出し切れることに気づきました。また、完成したプログラムはリハーサルを繰り返し、自分がやってみて楽しいか判断することも大切だと思いました。これからプログラムを作っていく際は清里で学んだことを十分に活用していきたいです。

3泊4日の森人講座でしたが、そこではインタープリテーションや環境教育について学ぶだけでなく、多くの大切な仲間たちと出会うことができました。みんな同じような志をもった人達だったので、すぐに打ち解け、3泊4日フルに語り合いました。言葉に表すことができないぐらいとても濃い4日間でした。ありがとうございました。

AY（東京大学大学院）

今回の講座に参加して、私はたくさんの気づきを与えてもらいました。中でも衝撃的だったのは、環境教育やインタープリテーションとは参加者主体型的・双方向的なものであるべしということでした。ただ話を聞いて知識を身に付けるのではなく、様々なことを自ら体験し、物事を考えるための価値基準や他者に対する想像力を身に付けることこそが重要なのだという言葉に「なるほど」と頷かされました。

私は来年度から環境省レンジャーとして働くことになります。具体的に何を担当するかはまだ定かではありませんが、今回の講座を受けて目指すことが2つあります。1つ目は、より多くの人々が楽しい体験や好きなことを共有できる仕組みを作ること。好きという気持ちは何にも勝る原動力になるようです。その仕組みを通じて、人々の「自然が好き」「日本が好き」という気持ちに火を付けられれば、次に何をすれば良いかは一緒に考えて行けるでしょう。2つ目は、日本全国や世界の人々とたくさん触れ合い、自分と相手の世界を繋げていくこと。そして、その相手がまた別のひとと、またその人がまたまた別のひとと、というように連鎖的に世界を広げていき、少しでも多くの人々が、視線はそれぞれに、けれども同じ方向を目指して歩いていければ素晴らしいなと思います。

MY（OB・佛教大学）

今回の講座を通して、環境教育は本や座学などからの知識だけではなく、実際に体験することで、自分で気づいたり考えたりできることを、身をもって実感した。また、環境教育は漠然と自然だけに関わ

るものだと思っていたが、自然だけではなく、自然と人、また人と人とを結びつけることができるようになった。

「無関心」という言葉が今回印象強く残っていて、今までは「無関心」という言葉にそれほど威力も怖さも感じていなかったが、今回「無関心」の言葉の意味を環境教育から深く考えることができ、無関心であることは意識もない恐ろしいものであると理解できた。そのような無関心である人に対して、少しでも興味を持つきっかけなどを与えられる人になりたい。

U I (東北大学)

僕は講座参加の仲間のように、環境教育系の団体に所属しているわけではない。だから、環境教育活動にどのような形で関わっていくかすぐには浮かばなかった。だけど、IT×EEを考える時間に出た「興味のないことでも仲の良い友達に話してもらったら、少しは興味を持つかもしれない」という意見で、少しは活動に関われるのではないかと思った。僕の趣味は旅行と登山なので、旅行先や山登りの最中に撮った自然の写真や感じたことを、自然そのものやその土地の魅力を乗せて友達に伝えていけたらそれは環境教育の一端を担えたことになると思う。また、研究者と、研究には関わりのない人との間にある距離を少しでも埋めていけたらいいと思う。

昔から研究者がそうでない人にとって遠い存在であるのは、キャッチボールの時、研究者がいつも、そうでない人に対して取りやすいボールを投げようとしていないからだと思う。投げようとしていたとしても受け手はとりきれないと思う。だから、卒業論文を書く来年は、卒論発表の時の伝え方とは別に、まったく関わりのない人にも分かってもらえるような伝え方を準備しておく必要があると思う。本当に感動した時に出る「すごい！」を、研究者にも関わりのない人にも言ってもらえるように来年1年間研究していきたいと思う。

N S (日本大学)

4日間の講座を通して、改めて環境教育を仕事としてやっていきたいと思いました。小学生の頃から、将来は自然の中で働きたい、自然のガイドになりたい、と変わらず思い続けてきました。来春からいよいよその時がやってくるのですが、いざ仕事として関わっていくと思うと、ちゃんと自然の解説ができるだろうか、お客さんに満足してもらえるだろうか、と不安も募っていました。そんな時にこの講座を見つけ、即座に申し込みを決めました。

講座の中で行っていただいたインタープリテーション体験では、次は何が起こるのだろうか、とどんどん引き込まれていきました。どうしてこんなにワクワクしたのか、それにはちゃんと細かな手法があったことを知り、目からうろこの連続でした。インタープリテーションは、いかに自然と親しむきっかけを与えられるか、人と自然だけでなく、人と人とをつなぐことも重要であること、その場の雰囲気を読み取ることなど、知識以外にも大切なことが多くあることに気づかせてくれました。

これから実際に働く際だけでなく、人とコミュニケーションをとる時には、ただ知識や情報を伝達するのではなく、色々な角度から見て、その人に興味をもってもらえるように話をしたいと思います。そのためには、まずは自分自身が常に興味をもって、物事を見ていこうと思います。

A H (中央大学)

いかに話せば伝えたいことを相手に伝えることができるのか、そして興味を持ってもらえるのか、こ

れを学ぶために私はこの講座に参加した。しかし、それ以上に今回の講座では、インタープリター体験や、プログラム作り、発表など様々な体験を3泊4日という短い期間ですることができ、様々なものを得ることができた。

これほど4日間を充実したものにできたのは、インタープリターの存在が大きかった。自然と人をつなぐのはもちろんのこと、人と人をつなぐ、また参加者に関心、気づきを促す役割を担い、その場の雰囲気作りをする。葉っぱ一枚を見せるにしても一人一人に、こそこそと話して興味を惹かせたり、参加者皆で遊びながら葉っぱを見せたりするなど、すべてのプログラムが参加者目線であったように思う。どのようにすれば参加者を楽しませられるのか考えられていた。それは、特に自分たちでプログラムを作る際に身をもって感じた。20分というプログラム内で参加者に楽しんでもらいつつ、自分たちの狙いを伝えることは、思っていた以上に難しかった。伝えると伝わるは異なることを実感した。狙いが上手く伝わったという人もいれば、わからなかったと答えた人もいた。様々な批評があり大変考えさせられた。今回の講座でインタープリターの役割を学ぶと共に、参加者への伝え方を学ぶことができた。参加者目線にたって考え、参加者自身に気づきを得てもらう。そのような機会を多くすることが重要でありそのような現場を提供できればと思う。

AK（滋賀県立大学）

私はインタープリターやエコツアーガイドといった環境教育者としてのキャリアは現段階では描いていません。ですが、今年（2013年）の猛暑や台風の被害、竜巻の発生などを見て、科学的なデータの裏付けなどはありませんが、地球に限界が来ているのではと肌感覚で思い、身の回りの仲間からでいいから「環境意識していこうぜ」と声掛けしていけるような人になろうと思い、インタープリテーションを学ぼうと思いました。講座体験を通じて、相手に“伝わった”状態にするにはどうすれば大切な論点に気づかされ、一方通行でなく双方向間の言葉のキャッチボール（意味だけでなく感情も）が必要ということを感じました。

インタープリターに資格はありません。つまり誰もがインタープリターになれるのです（環境教育の第一線で活躍なさっているインタープリターのみならずには皮肉に聞こえるかもしれませんが…）。身近な仲間に「環境意識していこうぜ」と声掛けすることも、インタープリテーションだと考えます。小さな規模にはなりますが、その輪は着実に大きくなっていくと信じています。1人でも多くの人々が環境に配慮した行動をとっていくことで、将来世代のみなさんの住みやすい世界を残すことが出来ます。そのためには、インタープリテーションのような啓発活動もさることながら、それよりも根幹にある「人と向き合える人を増やすこと」が必要なかもしれません。私は、人と向き合える人になることが目標であり、そういった人々を増やすことが夢なのかなと思っています。自分にできる環境教育活動は、啓発活動以前に「人と向き合うことに力を惜しまないことの大切さ」を伝えていくことなのかなと、講座が終わった今思います。

YI（一橋大学）

今回このプログラム全体を通して、改めて自然が人間に提供してくれる価値の素晴らしさを強く感じた。どのような形であれ、環境教育活動に関わっていく上で、根本的なものとなるであろうとこの感情を、今後も忘れることのないようにしていきたいと思う。また、環境教育活動というものにも同時に価値を感じることが出来た。活動そのものは勿論、その活動に従事している人々の人間的な素晴らしさに

ついて触れることが出来たことで、1つ環境教育活動の価値を確かなものとして実感できたと思う。

こういった学びを得て、今後私は主に2つの関わり方を環境教育活動でしていきたいと考える。1つは、自分自身が積極的に自然から学びを得るよう活動していくことである。例えばキャンプや山登りなど、簡単に始められるところから自然と触れ合える機会を自ら創って行き、継続的に自然に対する理解を深めていきたいと考える。また、自分自身が学びを得た上で、その学びを周囲に還元していくことを2つ目の関わり方としたい。今後自分が関わっていく人々に対して、自然について学ぶ機会やそのきっかけを提供していきたいと考える。特に、普通であれば環境教育活動に関わることのなかったような人々に興味をもってもらうことで、活動全体の活性化に貢献していきたいと考える。